



會談座 『ちた人い若の樂文』

稽古について

大西 お忙しい折柄皆さんお集り下さいまして……今度御承知の通り誠光社から「文樂」といふ雑誌が出て居りますが、……尤もこれはひとり文樂ばかりの雑誌ではございませんが、その催しで皆さんに色々なお話を承りたい。大體今までの文樂の座談會と申します、名人大家諸氏の會合といふことになって居りますが、今日集つて頂いた皆さんはまづ將來立派になれる若い方々ばかりで、もう既に出來上つて居られる大家の方々は殊更に敬選させて頂きまして、若い皆さんの御腹藏のなお話を承りたいと思ひます。たゞ松之輔さんなどはなか／＼の先輩で若手とは申上げられませんが、いろんな三味線道のことなど併せてお教へを頂きたいと思ひまして、特別にお願いしたわけです。……さて、では何から伺ひませうか……別に腹案はないのですが……先づ稽古といふことから……私たちの聞いてゐるところでは、昔の文樂の稽古といふものは實に厳しかった、昔の若い人々は實に眞剣だった、それが今の稽古は全くルーズになつて熱がない、かういふ先輩たちの意見を今日の皆さんはそのまゝ肯定するか、否定するか、先づかういふことから話して下さい……

濱太夫 むつかしい問題ですな……

大西 この間の「若手向上會」で「吃又」をやられたやうですが、まづ「吃又」と決ると、稽古の順番はどうなるか、誰について、どれ

ほどの日數、回数でやりますか。

濱太夫 合三味線の勝太郎君と相談の上大隅師匠にお願いしようといふことでお願いしたわけです。お稽古はお宅へゆきますと、晝夜舞臺へ出てゐられるので行き違つたり、よく逆になるので、樂屋で三回ほどやつてもらいました。

勝太郎 その間、朝早くきましてお師匠さんも忙しいし、太夫と三味線と連絡がむつかしく、師匠に三度か四度やつて貰つて、あとは濱さんと二人でやつたり……

大西 稽古してゐる間に、むつかしいところが出て來るでせうな……

濱太夫 結局私たちは常に聞き覚えの稽古が多いので、そこに聞き違ひがある、同じ文句のくさりでも、橋と箸と端のやうなもので、自分の耳の取り方でいろいろ違ふから、さて正式に師匠の前で稽古をしてもらふと、そこは違ふ、かうだとよく直されます。

勝太郎 それから折々困ることは、義太夫節といふものは同じ語り場でも師匠に稽古してもらつて一生懸命汗の出るほど教へてもらつてゐるのにその師匠より先輩の方が聞かれると、あそこはそれで違ふ、かうだといはれると、ではさうしますと直す、今度は何度もどうになつて教へてくれた師匠に申譯が立たない、われわれ後輩のものはかういふ時に困ります。

大西 さういふ時はどう解決するのですか。

勝太郎 結局自分では……と思つた方をとるよ

大西 ほかの音曲では師匠によつて白と黒ほどの違いはないですかね……

圖六 ほかの音曲では家元制があり流派がきまつてしまつてゐます、ところがわれわれの方はそれがいい、どう語つてもいい、どちらが本當だといふことがない、これが却つてむづかしいことになり、つまりややこしいですな……結局、家元があつて古流とか津太夫流とか決つてをれば今度は津太夫風によつてゐるなといふことになる。

つはめ なるほど、師匠方がよく聞いておけ、聞かぬといけないといはれるが、さて自分で稽古してみると恰好のつかないところがある、なるほどこんなところが常に聞いておけといはれるところやなと思ひ當る……それからこれは松之輔さんにもお話しなんですが、義太夫にはもつといふ教授法があつてもいいと思ふ。義太夫には口で教へられぬところもあるが、たしかにお稽古に上手下手がある、松之輔さん、喜左衛門さんなどは今日の文樂では特に教授法がうまいのであれ、若いものは喜んでゐます。教授法によつて稽古の間が短縮されるのは事實です……それから義太夫は聞いて覚えたらいいとよく師匠からいはれるが、つい最近までこれはまことに水臭い言葉や、むづかしければむづかしいほど手を取つて教へてくださればいいのと思つてゐましたが、結局聞く聞かぬはこつちの勝手、聞いていけ聞いていけといはれたことはなるほどこんな時に違ふのだなど、自分で語つた場合つくづく思ひ知ります。

濱太夫 私も「向上會」での「飯碗」「河庄」は役割が決まると、大隅さん、師匠(古観)のを毎日客席へ廻つて聞かしてもらひました。ところが今度の「壺坂」は教へてもらふだけだ。大隅さんの「壺坂」は殆ど聞きませんでした。

出席者

野澤 松之輔

竹澤 團六

豊竹 つばめ太夫

竹本 濱太夫

野澤 勝太郎

大西 利夫

二月 中 旬

日時 場所

大阪文樂座貴賓室

それは教へてもらつた師匠が大隅さんでなかつたので、ややこしくなるといけないと思つて殊更ら、聞かなかつたのですが、やはり舞臺で自信がなく、うまく行かなくて困りました。聞いておくことはやはり一番大切ですよ。

新しい教授法

大西 教授法がうまくやれば上達が早くゆく

だらうといふことをいはれましたが、松之輔師匠の稽古法には敬服してをりますが、それについての御信念なりコツとかなんとかなりましたら……

松之輔 信念といつてはありませんが、稽古も出来るだけ合理的にやつてゆきたいとは思つてをります、結局は聞いて覚えてそれを自分で伸ばしてゆくといふのですな……稽古次第で或る水準までは誰でもゆきますが、それ以上はそれをとる人の力です。昔の各先輩なり師匠そのものの教授法は大變に傳統的な稽古ではありますけれども、ある程度だんだん奥になつてゆけば先輩方の教授法がものをいつてくる、假りに三味線でいへば「テン」一つ弾くにしても心で泣いてゐる「テン」笑つてゐる「テン」だといつて六十ぺんも弾き直したと聞かされてをりますが、われわれにもその経験はある。では、どうしてさういふ「テン」の味ひが出てくるかといふと、何回も何回も一生懸命やる、やればその時でなくとも後日それがものをいふ、それはその教授法でひき出されるものでなくその習ふ人の努力だ、努力の試練といふことになつてくる、自分の力は自分でひつぱり出して来いといふのが昔の教授法だと思ひます。

つはめ 實際うちの師匠(古観)は絶対に修業は廣く他流にわたつてやれといふ方針です。非常に大きな氣持といひますか、好きなどころへ行つて稽古せよといふ主義です。

圖六 松之輔師匠が若いころ江戸堀のこの前の吉兵衛師匠の宅で、師匠が夜分御飯でも召

上つた後で氣が向くとお弟子さんたちに今日はこれを弾いてみよなどといつてやらせる、これが修業になつた。例へば今月(二月)の文樂で織さんと私とで「天綱島」の大和屋を出すことになつた。ところがこの場は三代目の越路師匠が御靈の文樂で出されてから二十五年にもなる、それ以後は誰も語つてゐない、それで誰か「大和屋」を覚えてゐる人はいやらかといふことになる、松之輔さんが覚えてはりますといへる、結局何十年前の努力が、今はじめて報ひられることになる。松之輔師匠のおかげで再び及ばすながらもわかれが「大和屋」はかういふものだったと復活したわけで、これでこの場も、ここ暫くは中絶をまぬがれ得たわけです。

「紙治」の手

大西 こんどの近松の原作のほうの「紙治」はあなたが節づけになつたのですか。

松之輔 いえ、以前からありました、紙治の内の方は六代目廣助師匠が手をつけられたものですが、こんど上演にあつて丸本をよく調べたところが、廣助師匠は院本の「ゴマ」をたよりに朱をいれたらと思はれます。それに部分的には多少「朱」が残つてゐたのぢやないか、それを補足されたのぢやないかといふ疑問がわいて來てゐます……いづれにしても今日やつてゐる半二の改作になる「炬燵」と原作の「炬燵」とを比べると、やはり從來の改作の「炬燵」のほうが遙かに派手な節づ

けで、聞いてゐてすつと面白い。それで文句の同じところは昔のまゝの節づけをそのまゝに流用して變つたところだけを廣助師匠の節づけに依つて新舊を組合ひてみたからよからうといふ意見があつた、織さんも團六さんその意見だつた、ところがそれから三日ほどかつて私がその廣助師匠の節づけを思ひ出してみたりしてゐるうちにおいゝ思ひ出して來ましたが、さうすると今度はそんな組合せが出來なくなつて、廣助師匠の手が無暗に變へられなくなつてしまひました。

團六 松之輔さんに昔の記憶をたどつて貰つて、廣助師匠の節づけを完全に聞かせて貰ふと、一個所として變へられぬものだと思はれて來ました、自分たちがそれを變へるなどは實におこがましい限りだと思はれて來ました。大したものですが、それが廣助師匠の藝術の力です、恐しい力です、例へば一つ「テン」といふ音でも、それを私たちが省略しようと思つても、それが女房おさんのかうしたところの、かうした氣分を現はすテンであるといふことがわかると、どうしてもそれが省略できなくなつてしまひました。「たのしむ」テンと「彈く」のを「たのしむウウウ」となつてゐます、そしてそこに「樂しむ」といふ氣分が出てゐるのです。

松之輔 「たのしむウウウ」のウミ地で、おさんの氣持、何か遠い昔を思ひ出してゐるやうな一つの悲しみの氣持が出てくるといつた節づけになつてゐるのです。これは少し専門的にわたりますが、このほかにも例へば「炬燵

に治兵衛またころり」といふ文句のところ「炬燵に治兵衛チテンテンツンまたころり」といつた節づけになつてゐる、これも普通なら「テンツン」だけでゆけるのに殊さらに「チテンテンツン」になつてゐるに「チ」は「テ」にしようと思つたところ、さてこれが變へられん、單に「ころり」ところふのでなく治兵衛が自棄的な氣分でころぶ、その治兵衛の自棄的な氣分がこの「チテンテンツン」でよく現はされてゐることに氣がつかしました、先輩は無意味には手をつけてゐない。悲しみの裏の喜び、喜びの裏の悲しみの節づけがよく出來てゐるのです。これでは變へようにも變へられませんが、勿論かうしたことは他にもあります、例へば「合邦」の段切など、なんのためにあんなにややこしい手をつけてあるのか、玉手御前が斷末魔の悲しみの最中になぜあんな派手なややこしい手がつけてあるのか疑問にしているましたが、あれは四天王寺の彼岸會の中日の境内の賑ひとか、えんま堂に参詣人の線香の絶え間のない光景とか、さういつた賑やかな参道の風景を表現してゐるのです、さう解釋するとそれがそのまゝ受けとれる。如何にも天王寺さんの雑沓がほうふつと眼前に浮んで來る。節づけの妙です。正面からすれば淋しい曲になつてゐるを逆にその裏をいつて淋しさを現はしてゐるのです。

稽古と聞き覚え

大西 つばめさん、古靱師匠が弟子のあなた

たちの手をとつて教へてくれるといふことは全然ありませんか。

つばめ こちからかいへば必ず教へてくださいます、實は私は十三の年から弟子入りしました。内弟子ではなかつたのですが、内弟子同様にして通つてをりましたが、その間に先づ七、八回は稽古してもらひましたかな。大西 僅かそれだけです、昔からみなさうです。

松之輔 さうです、結局それは自分の弟子を他人の手に委ねる、可愛い子に旅をさせるといふ考へぢやないでせうか、他の太夫さんに稽古してもらふ、他人だとアラを探してくるが、内弟子に對しては親子の情といふ氣持があるのですな……

大西 さういふ教授法を皆さん肯定してゐられますか……その傳統が將來そのまゝいつても勉強のためにいいですか。

濱太夫 それは時間があれば稽古日といふものを特別に決めてもらつて、その日にみんな稽古してもらつてといふのが、一番いいのですか……

勝太郎 一度稽古して貰つてそれを何回やつてもやれぬ、叱られる、そしていろ／＼苦しんでゐる時に人の弾くのをきかせて貰ふと自分の欠點がよくわかる。そして研究心が生れるのぢやないですか……聞き覺えるといふことは大切なことで、喜左衛門師匠に「壺坂」を弾けといはれ、それがウロ覺えでしたので、ひどく叱られました、その時人のを聞いておぼえないいかなと泌みこみました、それが

らは御飯たべてゐても二階の稽古を聞くといふ風に心がけて、そのおかげか、いま新作物でも出ますと、割合にその習慣がついてゐるからか、覺えが早くなつてゐます。だから聞かして覺えるといふことも結構だと思ふ。

松之輔 正式の稽古日をつくること、聞きおぼえの勉強、この兩方ともが必要だと考へます。

悪口をいつて欲しい

大西 ところが反對に大家級にいはすと、今の若い者は稽古をしてをらぬ、自分の語り場ギリ／＼に樂屋入りして、それが済めば直ぐさうなるといつて歸る、人のものを聞かぬといつてゐますが……

濱太夫 昔のやうに電車の便利もよくて、家も文樂座の近くにあれば、また物價も昔のやうに安い時であれば一日師匠のお手傳ひして稽古をしてもらつてゆけるが、この頃は食べ物を第一に考へねばならず、交通も二時間も三時間もかかつて文樂へやつと通りつといふ風では人のものを聞かせて貰ふと思つてもそれもできません……ですけれど藝に氣持を打ち込んでゐる者は一見聞かぬやうな顔をしてゐてもその實やばりよく聞いているのですよ……

大西 つばめさんがいつたやうに古軼師匠には七、八回教へてもらつただけといふが、つばめさんの語り振りはどうも古軼丸寫しだといふ定評がありますが……

つばめ そのことについて申し上げようと思つ

てゐたところで……先輩の太夫さんからいふと、われ／＼下のものは勉強しないといはれるが、また僕たちからいへば、上の方たちは遠慮して思ひ切つて悪いところを指摘して下さらないといふ風なことがあります……このあひだ山口先生（山口廣一氏）が私たち文樂の若手のことを「スクリーン・アンド・ステージ」に書いてゐられたのを見て、非常にうれしく思ひました、それは少しも遠慮なくいろいろ批評を、本當に思ひ切つてハツキリ書いてもらつてゐたので、私たちにとつて實にいい勉強になつたからです、最近私は織太夫さんのお宅へも、うちの師匠（古軼太夫）のお宅へも稽古にゆかないのですが、意識しないうちに師匠に似るのですな……自分の個性はあるはずだから、それを生かして行きたいと、それはいつも考へてゐます。

「向上會」の興奮

大西 昨年から千秋樂の翌日を若手の諸君の「技藝向上會」として切場を新進の人に語らせる方針を採りましたがこれは文樂としてなかなか英斷で甚だ欣ばしいことと思ひますが、その「向上會」も第一回の十月は皆さん大變成績がよかつた、それが回を重ねにつれ、どうも少し氣がゆるんでゐるのですか、評判がよくないやうにも聞いてゐるのですか……

勝太郎 第二回目の時は受持の發表が「向上會」の日の八日前にありましたが、八日では稽古が出来るので、この月はやめさせてくれといつたところが林さん（文樂幕内主任）か

らそんなことでどうすると無理にいはれてやりました。三回目は早く發表してくれましたから稽古する日が十六、七日もあつたところが反對にその餘裕のあつた時が成績が悪い、油斷してゐたのでせう、三回目は私だけでなくみんな悪いといはれました。

大西 むつかしいところですね、出演者が氣をつけんならんところですね……

瀧太夫 しかしこの「向上會」は實に私たちに、勉強になります。とにかく「向上會」の前日など家にゐても何にも手につかぬほど興奮してます(笑聲)……住太夫さんこの小住太夫君など、「向上會」の日は一日中ソワソワして樂屋にゐても十分間も坐つてゐないのです、三分ぐらゐるおきに便所にゆきます(笑聲)大西 そが若い人の値打ですね……勝太郎 小住君が役割の發表を見るのは、ちやうど中學校のあの入學試験の發表を見る氣持と一緒にしてゐました。(笑聲)つばめ 役割が出ると、僕らも家へ歸らずにウロウロウロウロしてゐます(笑聲)

舞臺監督の必要

瀧太夫 それから現在の文樂に對して一つ注文したいのですが、それは若手の向上會のときなど舞臺監督のやうな人が一人ほしい。この前の向上會の例でいふと、私の「吃又」に對して人形の紋昇君に理解があつたから相談し合つてうまく行きましたが、若し二人が仲が悪い場合だと、床の太夫の意見を人形が聞いてくれないことがある。こんなとき絶對權

力のある舞臺監督のやうな人がゐて、かうせよといはれ、ばい」と思ふんですが……

勝太郎 僕らも大賛成です

つばめ 僕らも大賛成です

瀧太夫 僕はかういう意見でやつてゐられるやうだが、自分はいくう意見のやうに思ふと床と人形を統制してくれる指導者、それも幕内の人でなく、全然素人の方、芝居でいふ演出家と云ふのですか、それを……松之輔 それはあつてもよろしいでせうが、結局その演出家が良心的な人で、公平な立場から師匠たちに、ここはかう思ふがと相談する、師匠もそれは尤もですな……といふやうな考へ梅に妥協點を見出して……といふやうな考への廣い公平な演出者ならいいが自分勝手な畑にひき入れようとするばかりの人は困る。

大西 實際問題としてなか／＼見當らぬね。

つばめ しかしさうした人は必要なことは必要ですな。

大西 部分的な點では必要だが全體的にはそのため妥協したおかしな藝術が出てこないともかぎらない。最近歌舞伎の梅玉さん自身から聞いた話だが、この間ラジオで古軼さんが「酒屋」をやつた。それを聞いて古軼さんがもし芝居のチョボを勤められるなら私は絶體に出ない、あの淨瑠璃ではやれませんが、私が舞臺でやらうと思ふ通りに語つてゐられるので、あれでは舞臺でじつとしてゐるか、逆に踊つてゐたらん」さういふてゐましたが、大へん面白と思ひました。

松之輔 さういふことが私らの方にもある、

理詰めにかたる太夫に理詰めめ、の三味線をもつてゆくと、理詰めと理詰めでおかしなものになる。

大西 だからある點で反對のものを合せて行くところに、面白いものが出るのがあり得る、氣持は同じに持つてゆかなければならぬが……

つばめ 松屋町の廣助師匠(六代目廣助)は總稽古の日に大序から打上げまでずつと客席の中央にゐて、本を前において悪い所をあ／＼せよ、かうせよと注文をつけたらうです。これは大先輩であるがために一座の人々も肯定してゐたが、同等の者だと意見の相違があつて、こんな總指揮的なことは出来ません。それでむしろ飛び離れた素人の方があればいい。

批評が聞きたい

勝太郎 總稽古の日に見てもらつて注意して貰ふのが一番有難いと思ふ、さうすると總稽古も、立稽古もいゝものが出来ると思ふ。

つばめ 例へば濱さんの、藝そのものやなしに、太夫の語つてゐることと人形のしてゐることと、例へば簡単な例ですが、襖をあけると語つてゐるのに人形は開けてゐないとか、さういふ部分的なことを強調してほしい。

勝太郎 「向上會」に稽古してもらつた師匠は自分が教へた者が語るときは御簾内で聞いてゐてくれる。そしてあとで批評して注意してゐてくれる、それを他の一般の師匠にもしていただきたい。薩で笑つてゐないで、一々面と向



つて注意していただきたいと思ひます。これをして貰へば實に有難いのですが……
瀧太夫 「向上會」のときさう思うのですが、濟んだあと一日でもよろしいから、先輩によつて批評をききたい。

勝太郎 それをつきりいつてくれるのは三味線の喜左衛門さんです、一般に喜左衛門さんのやうにしていたきたい。

大西 いひたいのだが、それをいふと若い人は恐いと思ふ人もあるらしい。
勝太郎 イヤ、われわれはさういふ先輩の言葉を期待してゐるのです。

瀧太夫 結局は公私混合してゐるのですよ。
勝太郎 役が濟んでから「ありがたうございました」「挨拶にゆく、その時は何かいつてくれないか」とこちらでは期待してゐるのですが

、ただ「結構でした」とお座なりの批評をいはれる、それを聞くと、むしろ「水臭いな」と思ふのですよ、人によつて私情がからむし……

團六 誰れでも自分のところへ、稽古にくれば、自分の型を教へる、だからそれをそのまゝやれば、それでよかつたといふ評が出る、これは藝をするものに或る程度仕方のないことだが……結局、教へて貰ふ人がこの師匠の長所はここだと知つて、それを採り入れるのが教へて貰ふ人の力だといふことになる。

つばめ 稽古についても黙つて聞いてをられて「まあ、結構でした」といはれると、なんとも知れぬいやな感じを受けます。
瀧太夫 中には皮肉なことをいふ師匠がゐる、今月はお前何々をやるのやさうやが楽しみにしてきかせて貰ふわ……」などといは

る、いやな氣持です。
勝太郎 要するに師匠たちはもう少し氣持を大きく持つて理解をもつていただきたい。
つばめ そかが藝をやる人の氣質といひますか、團六さんのいはれたやうに、稽古する人間が師匠の長所をはつきりみてとればいいが……

後繼者を求める

大西 それではしめくくりとして若い人たちは「將來の文樂」をどう考へてゐますか、きかないところを……

瀧太夫 私らはかう考へます、なんといひますか、私たちは藝ばかりをやつてゐまして他のことは何もわかりませんから、マネージャーといひますか、文樂座の、もつと運営のいゝるんな方面で、例へば學生のマチネーその他

古靱太夫が「山城少椽」に

今回、秩父宮殿下から文樂座の豊竹古靱太夫に「山城少椽藤原重房」といふ椽號が贈與されることになった。これは明治三十五年九月に二代目の越路太夫が小松宮殿下から「攝津大椽」を贈られて以來の慶事で、初代の竹本義太夫の「筑後椽藤原博教」から正に十二人目の椽位にあたる。
この椽號の御沙汰は昨夏、古靱太夫が御殿場の秩父宮邸へ伺候した際、親しく殿下から御言葉を賜つたもので、その後早大の河竹繁俊氏その他の有志が幹旋して今日の榮譽を見たものである。

文樂座では五月興行でそのめでたい披露を行つてゐるが、その榮譽はひとり當の古靱太夫一人に止らず文樂座自體の榮譽といふべきである。
因みに「山城少椽」の由來は古靱太夫の師二代目の竹本津太夫がチャリ語りの名人として有名な竹本山城椽に師事してゐた藝統的因縁にもとづくものである。

(寫眞は古靱太夫近影「サン」寫眞新聞提供)

將來進出してゆくべき方法を考へてくれるマ
ネー ज्याアがほしい、勿論義太夫の好きな方
でない駄目ですが……

勝太郎 文樂が將來亡びるとは、思ひません
が、内容即ちものは悪くなつてゆく感じがす
つばめ 後継者がほしいですな……

大西 後継者は出て来ると思ふ。
團六 隆盛になつてくれば後継者は出ると私
も考へます。

團六 經濟問題がそこには入つてくる。
團六 文樂が盛んになれば營業的に黒字にな
り、それだけ養成の費用も出てくる。今は古
鞆師匠とかその他年輩の師匠方は早く後継者
を養成せんならんと思ふが、潰さんくらゐの
卅歳臺の人は今の年輩の間に文樂を隆盛にす
る方向に力を入れてもらつたら、さうすると
自然と後継者も出てくるのじやないか、隆盛
になれば後継者は出るが、おもしろくないと
ころへは出てこない。

團六 文樂が盛んになれば營業的に黒字にな
り、それだけ養成の費用も出てくる。今は古
鞆師匠とかその他年輩の師匠方は早く後継者
を養成せんならんと思ふが、潰さんくらゐの
卅歳臺の人は今の年輩の間に文樂を隆盛にす
る方向に力を入れてもらつたら、さうすると
自然と後継者も出てくるのじやないか、隆盛
になれば後継者は出るが、おもしろくないと
ころへは出てこない。

保守か破壊か

團六 今日文樂は時間の關係上、大序から
切までやれませんが、ところが新劇を見にゆ
く方が例へば新協の「どん底」をみにゆく場
合、義太夫でいふ院本即ち、原作を大體知つ
てゐる、原作を二度なり三度なり讀んでゐる、
さうしてこそ舞臺もわかりもするけれど、文
樂は昔から「廿四孝」の四段目に勝頼さんが出

はつたが、その勝頼が「二段目」で身替りに
なつてゐるといふ筋書は知らない、今の時代
は理窟なしでは駄目だ、あの役者さん奇麗だ
と褒めるよりも、どういうわけであつたか
といふ理窟がわかつてゐなければ讀得させな
くなくては來てゐる「狐火」を見ただけで「ア
アよかつた」で済ませる人もだん／＼少くな
つて來た。ところが、このごろは初めから筋
を通してやらせうと思つても時間がない、それ
で一場だけ見せるとすると「一吃又」でも雅樂
之助の注進をカットしてしまふはうがわかり
易い、雅樂之助が出て來るので筋がややこし
くなるといつた説も出て來る。このあたりに
文樂の辛いところがあります。

松之輔 破壊するのじやないが、ある點現社
會に溶けこんでゆくやうな新しい義太夫を一
つ完成させてゆけば、結局この道に對しても
忠實だと思ひます。このまま自然消滅して象
牙の塔にこもつてしまふことは、どうでせう
か、庶民階級に生れた義太夫節、初代の義太
夫が宇治加賀樫らの古澤瑠璃にあきたらず、
その長所をとり入れながら社會的に民衆的に
とけこんでゆくべく苦心して近松門左衛門さ
んらと一緒に民衆化した義太夫節、先祖のさ
ういふ「文樂精神」にたちもどるのが至當と
思ふ。しかし、時世の流れも移り變つてゐる、
人心も變化してゐるから昔のままで世の中
と相容れぬものがあつて自然に時代から離れ
る、これは果してわれ／＼のたすさはつてゐ
る文樂の將來に對して誠實なのだらうか。
團六 若い新しい客を引くためにも、

さんなど作曲しやるのやから「四季の壽」
などを三味線二十挺なり三十挺なりつかつて
「野崎村」の道行のやうにまとめて、若い人に
わかり易い新しいものを拵らへてほしい、三
味線のオーケストラのような……
つばめ 新作にしても菊池寛とか吉川英治さ
んとか書いて下さればいいが……

會長さんにたのむ

團六 それから松竹の營業の方も文樂へも少
し足を運んでほしい、實際白井會長さんが小
屋へ見えたと皆の氣分が違ふ。

團六 「向上會」に會長さんが一回も缺かさ
ずお見えになつたことは、文樂一同こんなう
れしいことはなかつた、全く會長さんの顔が
客席に見えてゐると、みんなの士氣が違ひま
す、緊張する。

團六 潰さんが「飯椀」をやつてゐた時客席
のドアが開いてゐてお陽さんの光が舞臺へ入
つて來た。それを會長さんが見られてすぐ締
めるやうに注意されたが、會長さんが文樂へ
見えられてゐると、こんな小さい點にもお客
さまへのサービスが親切になるわけです、實
に有難いと思ひました。

一同 とにかく舞臺も表方も白井會長のお顔
一つで緊張する、是非とも度々文樂へも巡察
に來て頂きたい、これは一同の心からの希望
です。

●カットの寫眞は座談會の席上(右から團六、
松之輔、大西、潰太夫、勝太郎、つばめ太夫の
諸氏)